日本中國學會報　第71集　抜刷
2019年10月12日　発行

学界展望（語学）

佐々木　勲人
千葉　謙悟
野原　将揮
戸内　俊介
石崎　博志
池田　晋
八木　堅二
鈴木　慶夏

池田恭哉氏が高橋の阮籍・嵇康研究について論じ、関智英氏が小説に描かれた満洲国・中国占領地への眼差しを論じ、張競氏が高橋による文化大革命の視察記録の再読を試み、戴燕氏が中国の立場から高橋の生涯をまとめ、王俊文氏が竹内好や武田泰淳との関係を軸として高橋を中国研究の系譜の中に位置づけた。近年の竹内や武田についての研究と比すると、高橋の中国研究者としての側面についての研究は、まだ端緒についたばかりであり、今後の研究の深化が期待される。なお高橋については『桃の会論集』8（高橋和巳専集）（桃の会）もある。（鈴木将久）

◉語　学

はじめに

前集に引き続き、学界展望（語学）は日本中国語学会が担当する。本稿が対象とするのは、2018 年 1 月から 12 月に原則として日本国内で公刊された著書および研究論文である。ただし、重要なものについては海外で発表された研究成果についても言及する。

昨年より、学界展望（語学）は、『日本中國學會報』（日本中国学会）と『中国語学』（日本中国語学会）の両方に掲載されている。日本中国語学会の会員の中には学界展望（語学）の存在を初めて知ったという方もおられたようで、予想以上の反響があった。概ね好評を得たが、一部の会員からは取り上げられた研究成果に偏りがあるのではないかといったご意見も頂戴した。昨年も述べたように、執筆にあたっては、担当者が興味深いと感じた研究成果を主観的に取り上げるよう努めている。本稿においても基本的にその方針に変わりはない。また、一つの研究成果が複数の部門で取り上げられることもあるが、あえて調整等は行っていない。担当者がそれぞれの観点から論評を行っている。これも学界展望ならではのおもしろさだと考えている。

分類と担当者は昨年と同様である。文字と訓詁を一つにまとめ、文法・語彙を上中古、近代、現代の三つに分けた。「はじめに」は佐々木勲人（筑波大学）、「音韻」は千葉謙悟（中央大学）、「文字・訓詁」は野原将揮（成蹊大学）、「語彙・文法」については「上中古」を戸内俊介（二松学舎大学）、「近代」を石崎博志（佛教大学）、「現代」を池田晋（筑波大学）がそれぞれ担当し、「方言」は八木堅二（国士舘大学）、「教育」は鈴木慶夏（神奈川大学）が担当する。（佐々木勲人）

一、音韻

音声・音韻関連の研究についてまず単著から瞥見すると、第一に平山久雄『敦煌《毛詩音》研究』（好文出版）を挙げねばならない。氏は 1966 年に「敦煌毛詩音残巻反切の研究（上）」（『北海道大学文学部紀要』14-3）を発表、以後その続編を『東洋文化研究所紀要』に断続的に掲載し、他にも毛詩音に関する論考を多数発表されてきた。今回一連の論考がまとめられ、かつ中国語にて姿を現したことになる。7 世紀半ばから 8 世紀半ばにかけての音系を記録する資料に関する綜合的な研究であり、現代日本の漢語音韻

学の代表的著作になるだろう。第二に慶谷壽信『中国音韻学論集』（好文出版）。近世音を中心としつつ上古音や中古音についても大きな足跡を残された氏の論考 25 篇を収録する。

以下は個別の論文に言及する。上古音では野原将揮「「上古音以母」再構に関する初歩的考察」（『中国古籍文化研究 稲畑耕一郎教授退休記念論集』、以下『記念』と記す）、同「「少」の上古音再考―義通換読から見た上古音再構」（『中国文学研究』44）、同“Old Chinese “west”: *snˢər”, *Language and Linguistics* 19-4 を挙げる。氏による近年の精力的な研究は若い世代による日本の音韻研究の水準の高さを示すものといえるだろう。

中古音については鈴木慎吾「中古漢語の韻母体系について―唇音性の有無による喉音韻尾二分説を起点に」（『中国語学』265、以下『語学』と記す）、平山久雄「切韵同母韵**组**第 2 小韵亦同母的例外**诠释**―兼**论**痕韵替“中韵”后增**问题**」（『開篇』36、以下『開』と記す）、鄭光「反切考―「俗所謂反切二十七字」を解明するために―」（『開』）、水谷誠「『類篇』の無義注について」（『記念』）を挙げる。中古から近世にまたがるものとして林英津「從高麗譯音 (Sino-Korean) 看漢語音韻史上的送氣清聲母」（『開』）がある。

近世音では古屋昭弘「廖綸璣「満字十二字頭」について」（『記念』）を挙げる。『拍掌知音』の作者でもある広東省連州の人廖綸璣が廖文英の子であることを確認し、連州という複雑な言語状況を抱える地で育ったことによる多言語能力から（協力者とともに）自ら閩南語の韻図を編纂できた可能性を指摘する。また山口要「從麥都思《華英字典》看 19 世紀官話音系」（『開』）は Medhurst の字典を用いて来華宣教師が捉えた 19 世紀の官話音系を考察している。岩田憲幸「“南京音”和“浙江音”―“唐音”研究―」（『国際社会文化研究所紀要』20）は朝岡春睡『四書唐音辨』（1722）を用いて当時の日本に伝わった中国語音を検討する。現代音に関しては東孝拓・王**韫**佳「普通**话后**接声**调对**焦点音高的逆向作用」（『語学』）を挙げたい。

方言音韻および地理言語学では、まず官話方言を扱ったものに遠藤光暁「山東方言単字調の時系列言語地図」（『経済研究』10）、秋谷裕幸「江淮官話桐城方言における咸摂一等重韻舌歯音字」（『開』）、日高知恵実「中国・徐州方言の言語変異にあらわれた世代差について」と胡貴躍「中国・徽州方言の“雌犬”とその地理的分布」（ともに『人間社会環境研究』35）、千葉謙悟「J. A. イングル『漢音集字』（1899）と近代漢口方言」（『中国文学研究』44）を挙げる。遠藤論文は同一地域の同一特徴について異なる時期の分布を比較した時系列言語地図（time series map）を用いた研究であり、複数の都市・集落を含むある地域の言語地図を時間軸で結ぶことで三次元的な視野を得ることができる。また 1940 年代山東方言資料として Franz Giet 神父の研究を用いており、神父の生平や業績の紹介をも含む。日高論文は 160 人分の調査データを被調査者の出生年で 10 年ごとに区切った上で分析した労作であり、13 の調査項目について徐州方言の世代差を浮き上がらせている。

次いで呉語では平田直子「現代呉方音における古匣母細音字・古喩母字の声母表記について～摩擦の強弱の違いという観点からのアプローチ～」（『北九州市立大学外国語学部紀要』147）、季鈞菲「《南通方言疏證》研究―以孫錦標注通俗音為中心」（『神戸市外

国語大学研究科論集』21)、大西博子「二甲方言の単字調における音響音声学的分析」(『近畿大学教養・外国語教育センター紀要外国語編』9-1)がある。

最後に日本中国語学会全国大会(神戸市外国語大学)にて開催された2つのワークショップ「域外資料から近代口語を問う―文献言語学の挑戦と課題」および「汉语方言和普通话里的声调特性和时长分布模式」はともに音声・音韻を扱う企画として意義深いものがあった。前者は文献言語学、具体的には欧文資料を用いた各方言の音韻・文法に関する史的研究の概要と展望を論じ、後者は主に共時的な視点から漢語声調のモデリングを試みた。前者では吉川雅之「域外資料による粤語研究」、千葉謙悟「域外資料による官話研究」、クリスティーン・ラマール「域外資料による客家語研究」、岸本恵実「欧文資料による日本語研究」と題した報告がなされ、後者では遠藤光暁「曲折调的诞生和消失」、王红娟「晋语上党片的声调特性」、八木堅二「汉语方言轻声的频率地图」、王萍「汉语普通话不同语句类型的时长分布模式」の4本が報告された。　(千葉謙悟)

二、文字・訓詁

出土資料に関する研究は今年も活況を呈している。以下、興味深いものをとりあげたい。工藤元男『睡虎地秦簡訳注』(汲古書院)は中国史の専門家による「秦律十八種」「效律」「秦律雑抄」の訳注である。当該三篇は睡虎地秦簡の中核を占めるため、本書は秦簡を扱う上で必携の書となるであろう。谷中信一編『中国出土資料の多角的研究』(汲古書院)は国内外の中国出土資料に関する最新成果(学術論文だけでなく訳注等も含む)をおさめる。冒頭の大西克也「「非發掘簡」を扱うために」は、同(2017)「浙江大学蔵『左伝』は研究資料たり得るか」に比べ、さらに多角的な視座から「非發掘簡」を扱う上での問題点や使用基準を明確にしており、必読である。

以下、定期刊行物に言及する。『中国研究集刊』珍号(64)には、安徽大学所蔵の戦国竹簡に関する報告を翻訳した草野友子監訳「安徽大学蔵戦国竹簡概述」(黄德寛著)がある。当該竹簡には『詩経』に関連する竹簡が多く含まれており、公開されれば古文字学のみならず言語、文学等の様々な分野に画期的なインパクトを与えるに違いない。また福田哲之「清華簡の字迹とその関係性―第1類A・B・C種を中心に」は字迹と文献の性質との間に関連性があると指摘する。特筆すべきは、『祭公之顧命』において「我」字の形体が12号簡以降に変化を見せるが、実は句読符号(墨鉤)も「我」と同じように12号簡を境として変化を見せるとの指摘である。清華簡は今後も公表が続くことから、続刊を対象にしたさらなる研究が期待される。竹田健二「清華簡『越公其事』の竹簡排列と劃痕」は竹簡を読み解く際に重要となる「劃痕」を扱う。氏は『越公其事』において通常の劃痕といわゆる「逆次簡冊背劃線」が併存していることを指摘し、さらに劃痕の連続性を丹念に分析することで竹簡排列案の傍証とする。

『漢字学研究』は金文の訳注「金文通解」をコンスタントに収録しており評価される(第6号所収)。このほか「古文字学研究文献提要」では重要な論文について提要が付されており、便利である。また村上幸造「上古音入門　通假字を見るための上古音概説」は通仮を考える際に必要となる上古音の基礎知識を紹介したものである。通仮を論じる

際に、しばしば「音近可通」という類の文言が見られるが、どの程度「音近」であれば通用可能であるかについてはあまり共有されていないため、当該論考は有用である。ただし期待される事柄、たとえば円唇／非円唇母音や T-type ／ L-type 等の通仮を論じる上で肝要な点について詳しく触れられていないため、たとえば古屋昭弘（2009）「上古音の開合と戦国楚簡の通仮例」、同（2010）「上古音研究と戦国楚簡の形声文字」等の論考と併せて読まれることをお薦めする。

『東洋文化』98 は「出土文獻と秦楚文化（Ⅰ）」と題した特集を組む。海老根量介「戰國期楚における「日書」の利用について」は、文字そのものに関する考察は一部に限られるが、九店楚簡『日書』を資料として「文字知識の社会への浸透・拡大」という視座から楚における日書の形成と広がりについて検討を加える。宮島和也「試論合音詞“諸”在出土文獻中的分布及其含意」は出土資料を中心に「之」と「於」の合音とされる「諸」の分布を調査し、「諸」は魯方言に由来し、儒家文献との関係が密接であるとする。さらに「諸」は文化的語彙として各地の書面語に浸透していったと推定する。出土地点に偏在があるため、隔靴掻痒の感を禁じ得ないが、出土資料の利点をうまく活用した論考である。戸内俊介「甲骨文の非對格動詞から見る「不」と「弗」の否定機能差異」は甲骨文における「不」と「弗」について動詞の結果状態（あるいは状態パーフェクト）と「致使（使役）」という視点から論じたものである（ただし最新の研究成果は同（2019）「再び甲骨文の「不」と「弗」」（『シナ・チベット系諸語の文法現象２』）を参照されたい。）（野原将揮）

三、文法・語彙（上中古）

まず単行本から披見する。戸内俊介『先秦の機能語の史的発展―上古中国語文法化研究序説―』（研文出版）は、文法化理論に基づく、より一般性の高い中国語文法史記述に向けて基礎を固めることを目的としたもので、文法形式であったものがさらに拡張されて異なる意味機能を担うようになる変化を「広義の文法化」として位置付けつつ、この枠組みのもと上古中国語の「于」、「而」、「其」の意味機能的拡張について論じる。伝世文献に加え、甲骨文、金文、楚簡といった出土資料を幅広く用い、先秦全体を射程としたところが本書の大きな特徴である。

個別論文では、市原靖久「上古中国語の一人称代名詞“我”と“吾”について」（『語学』）は、一人称代名詞の分用原則を、主題者・対象者役割を担う主体性の薄い、他者を視野に入れた相対的・客体的な「我」と、動作主や経験者役割を担う、実感の伴った主体的・個別的な「吾」とに定めつつ、従来の格分用説や強調説を退ける。なお、目的語には通常「我」を用いるが、代名詞目的語が動詞前に倒置される否定文では、「不吾知也」（『論語』先進篇）のように「吾」も立ち現れる。市原氏はこれを例外的な現象として処理するものの、上古文献を見渡すとその用例数は等閑視できない。とは言え本論文は、述語動詞の意味的分類に基づき、一人称代名詞に対し綿密な議論を展開しており、説得力に富む。

宮島和也「試論合音詞“諸”在出土文獻中的分布及其含義」（『東洋文化』98）は、上

でも言及されているように、「諸」が魯方言に由来し儒家と関係が密接な語であったことを示したものであるが、それに反して、清華簡で「諸」が見られる文献は儒家と関わりのないものばかりであり、さらには清華簡自体が儒家の影響をほぼ受けていないとも見なされてきた。しかしその後公刊された『清華大學藏戰國竹簡（捌）』（後述）には、孔子との対話を描いた『邦家之政』が収録されており、清華簡にも儒家の影響があったことを見て取れるが、惜しむらくは当該篇に「諸」字はない。「諸」に関する宮島氏の所論の当否については、今後の新出資料をなお注視する必要があるが、本論文は現状用いることができる出土文献を可能な限り渉猟しており、記述面での客観性は高い。

山田大輔「古代漢語の時間副詞“既”“已”の機能変遷について—漢代・魏普南北朝を中心に」（『開』）は、「既」「已」が共に〈完了相〉（perfective）マーカーであるとの見解に立脚し、その使用頻度から「既」（春秋・戦国前期）→「已」（戦国後期・秦漢）→「既」（魏普南北朝）という通時的な交替があったことを示す。このうち、漢代以降「既」の使用が再び「已」を上回った原因として、それぞれの語に生じた機能拡張が大きく与ることを指摘する。「既」と「已」が真に perfective か否かについては、なお検討を要するが、本研究は各時代の用例を精査した上で使用比率を数値化し、丁寧にその機能的変遷を追究している点、着実である。

次いで、国外での発表であるが、文法と音韻双方の研究に影響力のあるものとして大西克也「**說**“見”—清濁音變構詞另解」（『歴史語言學研究』12）がある。「見」は清濁別義に係る語であるが、声母の清濁の対立を、ヴォイスや自他の転換の反映、言い換えれば、上古の文法範疇を示すものと見なしつつ、これをチベット＝ビルマ諸語の形態論的現象に関連づけるのが現在の音韻研究の主流である。しかし大西氏は、「見」の清濁の対立は、視線の移動を表す「見」（清音）から、対象の視野への侵入を表す「見」（濁音）へのメトニミックな意味拡張であって、文法現象ではないと主張する。本研究は、わずか一事例ではあるが、清濁別義をチベット＝ビルマ諸語の形態と安易に結びつける近年の上古音研究の風潮に対する警鐘となるとともに、上古の形態論的研究には、先ず以て個々の用例に対する精査を欠いてはいけないことを強く示す。

以上を要すれば、2018 年は代名詞や介詞、アスペクトなど、古漢語の「本流」とも言える研究に大きな進展が見られた。また専著も公刊されており、その充実ぶりは例年を上回る。中でも若手の活躍が目を引くが、これは古漢語研究を志す若手が増えつつあることの反映であり、この傾向は今後も続くと思われる。

最後に、資料面での成果を瞥見したい。新たに公開された出土文献としては、上でも触れた清華大学出土文献研究與保護中心編『清華大學藏戰國竹簡（捌）』（中西書局）が、儒家系や墨家系など先秦の逸書 8 篇を収める。出土文献の増加により、上古中国語の地域性の研究がより促されることが期待される。伝世文献の訳注としては、野間文史『春秋左傳正義譯注 第三冊〔文・宣・成公篇〕』、同『春秋左傳正義譯注 第四冊〔襄公篇〕』（ともに明徳出版社）、渡邉義浩『全譯顔氏家訓』（汲古書院）、川合康三ほか『文選 詩篇（一）～（四）』（岩波文庫）、山田大輔「仏教漢文を読む（二）—『百喩経』巻第二校注訓訳稿」（『火輪』39）などがある。上記の訳注は、古代中国語の文献に対し、日本

語による適切な理解を目指したものであるが、これは言うまでもなく、日本語を母語とする者が古代中国語を研究する際にも大きな助力となる。

さらに 2018 年は、漢文学習に関する名著の改訂・再版が相次いだ。前野直彬『精講漢文』（ちくま学芸文庫）や濱口富士雄『重訂版 漢文語法の基礎』（東豊書店）がある。

（戸内俊介）

四、文法・語彙（近代）

ここでは宋代から民国までを「近代漢語」とし、各資料ごとに分類して語彙・語法研究を振り返ることにしたい。

白話資料の研究でまずとり挙げるのは、王衍**军**『《聊**斋**俚曲》中的能性述**补结构**及其**历时发**展初探』（『開』）である。王論文は淄川出身の蒲松齢『俚曲』の可能を表す述補構造のタイプと、現代山東淄川方言の同構造を比較し、約 300 年間の変遷を考察したものである。結論として『俚曲』の“V ＋的 (O)”式構造は消滅し、清代前期に新たに流行した“VC 了”式構造が“V 的 C”式構造に取って代わり、現代淄川の主要形式になったとする。

植田均『《醒世姻**缘传**》成**书**于明代**还**是清代？—从**语词**特点来考察』（『中国語研究』60、以下『中』と記す）は『姻縁伝』の成書時期を、受動の“吃／喫”、程度副詞の“怪”、“很／狠”、時間副詞の“已経”、語気助詞の“呢”、介詞の“給”などの用法から考察している。そして『金瓶梅詞話』と『紅楼夢』と比較した結果、『醒』が清代北方で成立したと結論づけている。

次に満漢資料の研究に移るが、満漢資料研究の一つの総括として竹越孝「満洲旗人の言語生活—清代の満洲語学習書から—」（『東洋文化研究』20）、同『『一百條』・『清文指要』対照本（II）補遺·索引篇』（『神戸市外国語大学研究叢書』61）を挙げる。『Tang·Moyen』（一百條）は旗人の満州語能力の低下と「翻訳科挙」を背景に生まれた満州語会話教科書だが、これが満漢対訳本『清文指要』、満蒙漢三言語対訳版『三合語録』などに転用され、のちに『語言自邇集』など純粋な漢語教科書に変化する様子を、各本の対照から明らかにしている。荒木典子「武蔵大学蔵『有圖満漢西廂記』について」（『中』）は、一般に流通する京大本とは体裁の異なる、『西廂記』の満漢対訳本『有圖満漢西廂記』の特徴を考察し、その刊行を乾隆年間以降と推定している。

以下、中国以外で編纂・利用された域外資料をとりあげる。唐話資料に関しては、奥村佳代子「唐話の伝播と変化：岡島冠山の果たした役割 」（『東アジア文化交渉研究』11）が、唐話資料の内部差異について、代詞、疑問詞、語気助詞から考察している。その結果、漢人との会話を想定する『譯家必備』と、日本人が学問として学んだ中国語を反映する『唐話纂要』・『唐話便用』では、上記３品詞の用法が異なることを指摘する。

北京の官話を反映する『北京官話全編』については、関連論文を集成した『北京官話全編の研究・下巻』（関西大学出版部、以下『全篇』と記す）が出版されている。ここでは児化、代詞、副詞、介詞、語気詞、V **着**、VP ＋去、類似表現などを考察対象としている。一連の論考で、『全篇』の書写時期は『語言自邇集』（初版）から『小額』の間

（1867-1908）と推定（佐藤論文）され、『全篇』の内部差異は小さく（内田論文）、『児女英雄伝』や日本の官話教科書との言語的類似性などが指摘されている（渡部・塩山・齐論文）。そして『全篇』が市井の口語語彙を積極的に収集した結果、清代以前の用法を引き継ぐと同時に、それまでの資料では用例が見出しにくい“在着”や“程度副詞＋V着”の形式（稲垣論文）、語彙化されたVP＋去形式（“买东西去”）がみられ、児化が幅広い品詞にわたる現象（塩山論文）が確認されている。こうした点から『全篇』は『語言自邇集』とともに北京官話や北京の口語を考察するための座標軸となりうるものと考えられる。

泰西資料に関する研究で注目されるのは、塩山正純「聖書のなかの時間表現と漢語文理訳」（『関西大学東西学術研究所紀要』51）である。塩山論文は『聖経直解釈』（1636）以降の各種聖書に基づき、時刻表現と時量表現の変遷を論じる。清代では一日を96刻（1刻=15分）とした計時単位が行われていたが、英中における時間単位の齟齬を、中国語に如何に「翻訳」したかという問題意識に基づく。

2018年は訳語関係で単著の出版がみられた。荒川清秀『日中漢語の生成と交流・受容 漢語語基の意味と造語力』（白帝社）は、「空気」「健康」「電話」「化石」「盆地」等、日中両国語に共通する漢語の生成と伝播を語基の問題から探究している。近代語におけるロプシャイト字典の影響を再検証し、外国地名の意訳にも言及する。清地ゆき子『近代訳語の受容と変容 民国期の恋愛用語を中心に』（白帝社）は、文学作品にみられた恋愛用語（「自由恋愛、三角関係」等）が中国語に移入された様相を、現代中国語への継承と影響も視野に入れて論じる。近代的な「恋愛」という概念が中国で理解され始めたのは20世紀からで、主に日本で創出された語彙が大きな役割を果たした様子が垣間見られる。

田野村忠温「言語名『英語』の確立」（『東アジア文化交渉研究』11）は、言語名Englishに対する日中双方の訳語が19世紀を通じて「英語」に定着するまでを考察する。日本語の「英語」は当初、書面語として用いられていたが、のちに口語にも使用されたと結論づけ、日中間で呼称が一致する現象には、相互の影響を示す証拠は見いだせないとする。（石崎博志）

五、文法・語彙（現代）

現代語ではまず、楊凱栄『中国語学・日中対照論考』（白帝社）を取り上げたい。現代語文法・日中対照研究の第一人者として学界を牽引してきた楊氏のこれまでの論文の一部をまとめたもので、“了”、スコープと焦点、数量強調、全称表現、ヴォイスなどの7部構成、全17編が収められる。いずれも氏が力を入れて取り組んできたテーマばかりであり、これらがまとめて読めるようになったことには大きな意義がある。

上記以外の論文・単行本については、以下、テーマ別に取り上げていく。語彙研究の面では、料理名を扱った文楚雄・陳敏「中華料理名の構造について」（『島津幸子教授追悼論集 ことばとそのひろがり』6、以下『ことば』）がある。2000以上もの料理名を分析し、中華料理の命名の法則を、素材の形状や調理法から、伝説由来のものに至るまで、

幅広く網羅的に整理している。２つの調理法を併記する場合があることなどはこれまであまり指摘されていなかったように思われるが、両氏によれば少なくとも“煎扒”“煎烹”“炸溜”“扒**烧**”“爆炒”が存在するとのこと。併記のパターンとしてなぜこの５つだけが成立するのか、考えてみれば不思議な問題である。このほか荒川清秀『中国語を歩く―辞書と街角の考現学パート３』（東方書店）にも語彙の話題が満載。

野田寛達「「事態認識構築」の“怎么”と２つの機能について」（『語学』）は疑問詞“怎么”の意味を扱った研究。原因を問う用法と方式を問う用法を統一的に説明しようと試みたもので、いずれも話者が「事態認識」をするために必要な「理（ことわり）」を問うものとしてまとめられることを主張する。原因用法とは事態成立の「道理」を問うものであり、方式用法とは事態内部のプロセスの「論理」を問うものにほかならない。

次に数量表現を扱った論考を２編とりあげる。まず前田真砂美「差を表す〈A 很多〉」（『ことば』）は、1990 年代後半以降に広まってきたとされる“A 很多”について考察したもの。コーパスに基づく調査などから“很多”が数量補語であることを確認したうえで、普通話においてこの形式が受け入れられたのは、類義形式“A 不少”“A **许**多”がカバーできなかった用法上の空白を埋めるためだとする仮説を提示している。新しい表現形式を扱う際に、それが受け入れられる背景にもきちんと目配りをすることは、忘れてはならない重要な視点であろう。中田聡美「“V 了＋有＋数量構造”に関する認知的考察―“V 了＋数量構造”との比較を通して―」（『現代中国語研究』第 20 期）では、数量構造の前に“有”が付加された“**喝**了有三杯啤酒”のような表現において「主観的大量」の解釈が生じる原因や構文の制約について考察している。中田氏によれば、この構文は話者の連続スキャニングを反映したものであり、時間軸に沿ってプロセス展開を逐一認識していくところから「大量」の解釈が生じているのだという。注目されるのは、本来動詞であるはずの“有”がここでは数量に対する「大量」という主観的評価を表すためだけに用いられている点である。中国語における話者の主観的評価は、この構文の“有”のように、思わぬ所に潜んでいるものなのかもしれない。

続いて構文研究として、李菲「体験の観点からみる“挨 V”受身文の意味機能」（『ことば』）を取り上げる。“被”字句など典型的ヴォイス構文の陰に隠れがちだった“挨 V”受身文についての論考で、V の「負の影響」が文の成否を決定する要因であることなどを述べたもの。中でも興味深いのが、イディオム化の進んだ“挨打”“挨**骂**”などについての記述である。これらは一種の行為タイプとして「体罰」「叱責」などの問題行動を表すが、２つある拡張形式のうちの１つ“挨 NV”では一般的な行為タイプという読みが生じやすいのに対し、もう一方の“挨 N 的 V”では反対に特定の人物による個別の動作という解釈に傾くという。その理由については今後の課題とされているが、李氏自身が示唆するとおり、構文でもありイディオム的でもあるという二面性が解決の糸口を握っているように思われる。

『ことば』には、池田晋「多様性の複文―疑問詞連鎖構文の形式と意味―」、中根綾子「“一 A 就 B”の形式の意味と用法の意味」、長谷川賢「中国語の限定選択構文の典型的用法と表現機能」、李佳樑「北京語における“**赶**”系列機能語の盛衰」など、複文

を扱った論文が多い。このうち長谷川論文は“要么A要么B”“要不A要不B”“不是A就是B”の3形式の機能上の異同を詳細に論じたもの。この3者は「AかBのどちらかだ」という基本的意味を共有しながらも、一回的事態に用いられるか恒常的事態に用いられるか、A、Bの内容が対立的か否か、などの点でそれぞれ違った特徴を示している。

小野秀樹『中国人のこころ―「ことば」から見る思考と感覚』（集英社新書）では、「中国人は目上の人にも『うん』と返事をする」「中国語では呼び掛け語が挨拶になる」などといった話題を出発点として、中国語やその背景にある思考様式に対し鋭い分析が展開される。あいづち、応答表現、挨拶、呼称など、日常の会話において不可欠でありながら、非母語話者にとっては微妙な感覚が掴みづらい問題において新たな知見が示されている点がとくに注目される。学習者に円滑なコミュニケーションを身に付けさせるためには、今後はこうした表現に対する研究もより一層深めていく必要があるだろう。なお、呼称を扱った論考としてはほかに史彤嵐「现代汉语中对陌生人的称呼语」（『中国語文法研究』2018年巻）がある。

羅希・定延利之「ユーモアを生み出すための日中の「間」―ボケとツッコミのタイミングに関する考察―」（『日中言語研究と日本語教育』11）では、日本人と中国人の被験者に漫才（および相声）ふうの対話を聞かせて、ベストと思われてるツッコミのタイミングを回答してもらうという実験をおこない、笑いの型や言語によって「間」の置き方に違いが生じることを実証している。こうした実験研究は、音や文字では表されない「間」も1つの考察対象となりうることを改めて気付かせてくれる。ちなみに実験に使われた対話は、「夢路いとし・喜味こいし」のお馴染みのやりとりをベースに、著者らが自ら作り上げたものとのこと。

理論言語学的立場からの中国語研究としては、于一楽『中国語の非動作主卓越構文』（くろしお出版）がある。結果複合動詞構文、供用句、存現文などにおいて特殊な語順（非動作主主語）が生じるメカニズムを、語彙概念構造（Lexical Conceptual Structure、LCS）の観点から説明している。例えば、結果複合動詞構文“张三追累了李四。”においては李四が张三を追いかけて疲れる解釈が成立する（非動作主主語）が、“张三冻死了李四。”では李四が张三を凍え死なせる解釈は許されない。于氏はLCSさえ正しく記述し分けておけば、先行研究のいうような煩雑な規則を設ける必要はなく、あとはごく単純なルールだけで、これらの解釈の差を合理的に説明できることを指摘している。

その他、翻訳だが、沈家煊（下地早智子監訳）『認知と中国語文法』（日中言語文化出版社）、何元建（山口直人訳）『現代中国語生成文法』（好文出版）が刊行されている。

（池田　晋）

六、方言

まず類型論的研究として飯田真紀「Sentence-final particles in Cantonese and Japanese from a cross-linguistic perspective」（*Media and Communication Studies* 71）は著者の長年に渡る広東語の文末助詞研究を踏まえ日本語と広東語の文末助詞を分析し、

その類似点として文末以外にも一定の伝達内容を持つ文中の句や語の後に生起する点、開口度の大きな開音節の母音を有する点を挙げ、文末助詞の使用頻度や義務性の高さが伝達態度の標示の半義務化・文法化につながったと指摘する。文末助詞とイントネーションの関係にも言及し今後の展開が期待される。類型論といえば主要言語の比較・対照となりがちだが、その対象は閉じた言語体系であることが前提となる。他方、言語地理学は言語体系の開かれた側面（すなわち変化）に着目して研究を進める。鈴木史己「試論表名物詞多様化的成因―以〈高粱〉義詞爲例」（『開』）は「高粱」の全国地図から語彙の変化の方向性に有縁性を高める変化と低める変化の双方がある事を言語地理学的に示す。言語横断的研究としては遠藤光暁「アジア地理言語学プロジェクト 2015-2017 概要」（『方言の研究』4）が現在進行中のアジア全域を対象とした言語地理学的研究の概要として参考になる。また韻律に関する論考には八木堅二「中国語方言韻律研究の言語類型地理論的課題」（『外国語外国文化研究』29）がある。言語体系を閉じられたものとするか開かれたものとするかという一見相反する立場をどのように統合するかは目下の課題であり、それぞれの立場で着実な研究を重ねることも重要だが、分野を超えた研究交流の深化も必要だろう。

文法に関する記述・分析として、佐々木勲人・樊**晓**萍「**绍兴话**的**处**置句和被**动**句」（『現代中国語研究』20）は紹興方言の処置句と被動句に分析を加え、「**则**」を用いる処置句が不本意の意を持つ点がその使用頻度の低さにつながると指摘し、「**拨**」が放任使役として用いられる点が被動用法の成立につながったとする。その他、遠藤雅裕「論臺灣海陸客語的情態標記「會」」（*Language and Linguistics in Oceania* 10）、同「臺灣海陸客語「識」字的語法化―從動詞演變為體標記―」（『記念』）、飯田真紀「広東語の文末助詞連鎖の形態論的分析」（『ことば』）等がある。

個別の音韻項目の変化に関する研究として、秋谷裕幸「江淮官話桐城方言における咸摂一等重韻舌歯音字」（『開』）は江淮官話において類例の少ない現象の形成を論じている。その他、元海峰・李明**兴**「**东**港方言“蟹止山臻”四**摄**合口呼 u 介音的**变**异研究」（『開』）、蔡佞「古尤韵字在**苏**州北郊地区的**读**音与分布」（『開』）がある。同音字表には蔡芳「安**远**（**鹤**子）客家方言同音字**汇**」（『開』）があり、蔡**华样**・**刘刚**「**盐**城市方言**语**音概况」（『開』）は複数地点の母音・子音・声調の目録。

記述的研究と関連して、張盛開「平江方言文化之蓮花落」（『静言論叢』1）は平江で行われる祝儀歌「蓮花落」の言語を調査・分析し発音表記を公開する。押韻では即興曲では舒声と入声や [-u] と [-ʉ] が押韻するなど、伝統曲に比べ緩やかなこと、語彙や文法に口語の反映がみられることなどを指摘する。地方芸能の言語研究上の価値については早くから認識されているがその言語学的調査・分析はあまり進んでおらず今後の進展が待たれる。

歴史的文献を用いた方言研究には千葉謙悟「J. A. イングル『漢音集字』（1899）と近代漢口方言」（『中国文学研究』44）、山口要「從麥都思《華英字典》看 19 世紀官話音系」（『開』）、**张坚**「两种新**发见**的早期潮州方言文献音系性**质**」（『開』）がある。

中国語と周辺言語の接触に関する研究として川澄哲也「**试论汉语**河州**话**的形成**过**程」

（『ユーラシア諸言語の多様性と動態』20）は、様々な民族が雑居する甘粛・青海境界付近にある漢語方言の一種「河州話」について、動詞と目的語、形容詞／数量詞と名詞、格標識および歴史的な各民族の居住状況から清代中後期に土族と蔵族が漢語を転用し、当地の漢族による模倣・受容を経て成立したと推測する。同「Typology of Language Changes of Chinese Induced by Contacts with Mongolic Languages」（『言語文化研究』37-2）は、西寧・唐汪・河州各方言と『老乞大』等の元代のモンゴル語の影響を受けて成立した文献をもとに、モンゴル語の漢語に対する影響の類型として、SOV 語順、後置格標識、副動詞語尾類似成分、複数標識の拡張、否定語に先行する副詞、有定名刺＋場所語＋有の形式を挙げる。同「Typology of Language Changes of Chinese Induced by Contacts with Tibetan」（『松山大学論集』30）はチベット語との関係をまとめる。

なお秋谷裕幸『閩東区寧徳方言音韻史研究』（*Language and Linguistics Monograph Series* 60）、沈明・秋谷裕幸「呂梁片晋語的過渡性特徴」（『中国語文』4）、岩田礼「Chinese tonal neutralization across dialects: From typological, geographical, and diachronic perspectives」（Tonal Change and Neutralization, Phonology and Phonetics Series 27）、石村広「汉语南方方言的动宾补语序—兼谈与壮侗语的语言接触问题」（『语言研究集刊』20）などが海外の主要雑誌等で発表された。（八木堅二）

七、教育

教育研究は、言語の研究（中間言語・目標言語、教育文法等）と人の研究（学習者・教授者および両者のインタラクション等）とに大別される。言語の研究は、目標言語についての詳細な記述的研究が教育に応用できるという期待があった。しかし、他言語での研究動向と同様に、昨今は、目標言語から中間言語へ、記述的文法体系から教育用途の文法体系へと、考察の中心が変化しつつある。

中間言語をその産出理由とともに論じたものとして、張恒悦「中日両言語の比較構文について—誤用例“*我比米饭喜欢拉面”を手掛かりに—」（『中国語教育』16、以下『中』と記す）では、日本人中国語学習者による“*我比米饭喜欢拉面”等の誤用形式に対し、日本語と中国語の比較構文における仕手比較・受け手比較という点にもふれながら、原因と対策を述べる。李佳「典型动宾搭配的接受性习得与产出性习得的对比分析—以日本中级汉语学习者为对象」（『中』）は、典型的な動詞と目的語のコロケーションである“依照法律”の産出が日本語母語話者には難しく、かわりに“根据法律”“按照法律”を産出すること等をコーパスと学習者調査を用いて記述する。

『中』の「大会報告」では、教育用途の文法のあり方を改めて問い直す。丸尾誠「『教科書通り』にいかないこと」は、教科書にはこう書いてある・規範ではこうなっているという文法記述が、他の同種の事象に適用できず、時に中国語母語話者から否定される事例を述べる。町田茂ほか「要点式学校文法の再検討」は、初級・中級の文法要点として学習すべき範囲や深度、中国語教育における文法学習の位置づけ等、学校文法の捉え方に関する多様な観点に触れたうえで、学校文法を高度な語学力を有する人材育成に寄与する中国語基礎文法学習の大綱ととらえ、要点式学校文法（案）を提示する。張恒悦

ほか「基于日语母语这偏误分析的在日汉语语法教学」では、現行の通説的位置づけにある文法体系は、中国での教育文法が直接移植されたということもあり、様々な文法事項が同列に扱われているが、教育上は、日本語母語話者が誤用を産出しやすい文法事項には学習の重みづけを大きくすべきだと主張する。

人に対する研究では、社会との関連を意識した実践的な視点が顕著である。学習者のどういう能力を向上させるのか、学習者が地域や社会とどう関わっていくか等、外国語教育の本質的な目的を探求しようとする傾向が目立つ。

植村麻紀子「中国語教育における CLIL 活用の可能性―“中国留守儿童”を題材に―」(『中』) は、外国語の学習を通して何かのテーマを学ぶクリル (C(ontent) and L(anguage) I(ntegrated) L(earning)) と称される内容言語統合型学習を実践し、「社会に貢献できる得意分野」「多様な他者と課題を達成する協働的実行力」等を高める教育活動を記したものである。阿部慎太郎等「大学中国語教育における絵本読み聞かせ活動の試み」(『中』) では、近年の大学教育では地域との連携、地域への貢献を通じて、社会の一員としての自覚を育てる「シティズンシップ教育」が求められていることに向き合った実践報告である。植村報告や阿部他の報告は、教育活動の中で現れる学習者 (の学びや意識) の変化を論じるアクション・リサーチでもある。应洁琼「基于语言社会化理论的留学生汉语语用能力发展研究」(『语言教学与研究』5) は、言語社会化論の観点から、社会活動が学習者の語用言語的能力 (pragmalinguistic competence) と社会語用的能力 (sociopragmatic competence) の発達にどう影響するかを縦断的に記述する。

内発的動機等、学習者の内面に関わる事象と外国語教育の目的や可能性に言及したものとして、沉默「第二语言学习中的认同研究进展书评」(『语言教学与研究』1)、山崎直樹「『権威』の要らない言語学習の可能性― ICT と学習者オートノミー―」(『漢字文献処理情報』18) がある。沉論文はレビュー論文である。第二言語学習・習得において学習者のアイデンティティがどのように扱われてきたか、アイデンティティ発達の影響要因、アイデンティティ発達と第二言語習得との関係、教育上の方策等、国内の中国語教育研究ではまだ成果蓄積のない分野の研究例を整理してある。山崎論文では、学習者が機械翻訳を利用して作成した解答を検証しないことについて、学習者は産出形式の構造的な誤りや運用上の適切性に対する意識を高めておく必要があると論じつつも、その判断を教師等、自分以外の者に委ねる態度をとるべきではなく、また産出形式の正誤を判定する権威としての教師は必要ないと主張する。その理由として、機械翻訳の精度が上がるにつれ、適格な言語構造を検証する役割としての教師は存在意義が薄れること、適切な慣習的ルールに合う談話の生成は教師がいても難しいと判断せざるを得ないことを述べる。

(鈴木慶夏)